

平成25年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	名古屋市立菊里高等学校	氏名	川口 茉莉
-----	-------------	----	-------

1. 印象に残る写真2点

●「ガーナ人になりきってみようとしたが…」



ガーナ人は頭の上に荷物を載せて運ぶ。実際にはどんな感じだろうと思い、マコラマーケットでバナナを販売している人に試させてもらいました。すごく重く、手で押さえていないと全く支えることはできなかった。

●「Akatsi Basic School の子どもたちとともに」



ガーナに行く前から学校訪問を楽しみにしていた。「こんにちは」、「元気ですか」と知っている日本語で挨拶をしてくれた元気いっぱいの生徒たちと肩をくんで最後に記念撮影をした。

2. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

この研修を知る前にはカカオとアフリカにあるどこかの国というくらいしか、ガーナに対する知識がなかった。ガーナではとにかくガーナのありのままの姿を知ることがを心がけた。現地では食生活を体験したり、現地の人たちやガーナで活躍する日本人と話したり、ガーナ人の生活に入り込んだりと様々な経験をした。私自身の五感で感じたよい面も悪い面も生徒たちにすべて伝えていこうと思う。

特に生徒たちにはガーナでの生活や教育環境の実態を伝えた上で、過酷な状況でがんばる日本人がいることを伝えたい。日本のように何でも揃っているわけではない環境で、現地にあるものを工夫して人々の生活向上に努める天水稲作持続的開発プロジェクトの JICA 専門家の方たちやクマシ技術短期大学のシニア海外ボラン

ティア、青年海外協力隊の方々。支援をする上で重要なことは、日本にあるものをそのまま移管するだけではその場限りの援助になってしまう。自らの専門性を活かし、現地の状況を理解したうえで支援していくことの大切さを伝えたい。

3. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

ガーナの印象的な光景といえば、頭に物をのせて運ぶ人々の姿。物売りが売り物のピュアウォーターやバナナなどを大きな銀色のたらいのようなものに入れ、頭の上にのせて売り歩いているのが特に印象的だった。通常の道ではもちろんのこと、信号待ちで渋滞している車の間を頭に物を載せたまま売りに来ていた。そして信号が変わればさっと引き上げる。カバンを持っている人も、日本人のように肩からさげたり、手で持ったりせず頭に載せていた人も見かけた。

どのくらい重いのか知りたいと思って、私も頭の上に物を載せるのを体験させてもらった。まずは布を輪のようにしたものを頭に置き、そのたくさんのバナナがのった大きな皿を載せた。重さもかなりずっしりときましたが、手で支えないととても安定することはできなかった。

ガーナ人は重たいものを手を使わず頭だけで支えて持っていました。これができるのは姿勢がいいからだと思います。日本人は生活習慣から猫背になりがちですが、ガーナ人のように頭でものを運ぶようになれば、姿勢のいい人ばかりになるのかもと思った。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

今回の研修で学んだことの1番の収穫はガーナで活躍する日本人の姿を見ることができたことだ。青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、JICA 専門家、企業派遣などガーナに来たいきさは異なるが、どの方も持っている専門知識や経験を、現地の実情に合う形で工夫して伝えていた。資金や日本の高度な技術を伝えるだけではその場限りになってしまうが、現地のものを使って、現地の人々が習得可能な技術を伝え、現在働く日本人が帰国後もガーナ人たちが継続して取り組めるようにしていた。

現在、勤務している生徒に対しても、今後の進路を考える上でどんなことでも良いので、自分の好きなことにとことん向き合いその専門性を磨くことの大切さを伝えたい。それを日本国内で活かすことはもちろんのこと、海外で活躍することも選択肢にすることができるようなチャレンジ精神をもってほしいと思う。自らの専門性を、日本だけでなく世界で活用できる人を育てていきたい。

（3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

今回の研修では、アカチの公立小学校とメアリー・スター・オブ・ザ・シー国際学校という私立中学校の2つの学校を訪問させていただいた。渡航前に、ガーナでは多くの教育問題があると本で読んだ。教員の給料が安いために、やる気がなく、授業時間を守らない教員が多い。教材研究もせず、ただ教えたいことを板書するだけの授業形態が多い。子どもたちも勉強したい気持ちがあっても、十分な筆記用具や教科書を持っているわけではない。そして子どもを学校に行かせる必要性を感じていなかったり、制服や教科書を買うお金がなく、学校に行かせていない親も多い。といったことを知った。

今回訪問した公立小学校はガーナ内の公立小学校の中ではとてもレベルの高い学校とのことでしたので、私が抱いていたイメージよりもずっと良い内容だったように思う。現地教員が行う小6の算数の授業を見せていただいた。内容は利益と損失に関するもので、実社会で役立ちそうなものであった。しかし導入から練習問題の難易度が急速にあがり生徒がとても困惑していた。また、授業の後のガーナ人教師との意見交換でも、先生たちからは向上心はあまり感じられなかった。しかし電気がなく薄暗い教室で、ボールペンもない子もいる中、一生懸命勉強する子どもたちの姿が印象的だった。

対照的に、私立中学校では生徒たちのやる気があるのはもちろんのこと、生徒の成績や教養力をのばすことに使命感を持ち、教材研究も熱心に行っている姿を感じることができた。1学期の授業料が200~300セディと安くはない授業料を払ってでも、子どもに良い教育を受けさせるために私立学校に行かせたいと思う親心を、2校を訪問して感じた。

4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

JICAは青年海外協力隊やシニア海外ボランティアのようなボランティアを派遣している機関だと思っていたが、JICA 専門家のように高度な専門知識を持った人たちがプロジェクトごとに採用され、途上国の発展のために寄与している点である。

今後あるといいのは、一般市民にも青年海外協力隊等の活躍が広く伝わったら良いと思う。

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

ホテルの支払いがドル払いができるので、少額のドル紙幣も持っていた方がよい。ホテルにはおつりが十分に用意されていないことも多かった。

6. その他全般を通じての感想・意見など

参加者の中には英語が話せない人もいたので、現地の人とコミュニケーションが取れる程度には現地語もしくは英語が話せる人がスタッフにいと良いと思った。

以上